
適者生存 = 弱肉強食 = 盛者必衰

ドーナツ教開祖 安藤ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

適者生存Ⅱ 弱肉強食Ⅱ 盛者必衰

【Nコード】

N6963N

【作者名】

ドーナツ教開祖 安藤ナツ

【あらすじ】

本屋の店主と女子高生小野の与太話。
いったい全体、店主は何を天才と定義するのか？

人生不敗 鬼の目にも情 に出てくるラストサムライ、天下五剣の
《十本刀》多鞘関守の過去に迫る。

(前書き)

人生不敗を知らない人も大歓迎ですよ。

「店長。あの多鞘さんとどう言う関係なわけ？」

いつものように駅前の本屋を放課後に訪れた小野は、たった今買ったばかりの漫画から目を離さずに、カウンター越しの正面に座る店主にそんなことを訊ねた。

多鞘関守と店長、それに小野なつめの三人が知り合いだとかわかってもうずいぶんと経つが。何故今更なのだろうか。店主が不思議そうに訊ねると、「なんとなく」とつれない答えが返って来た。漫画を読みながらの所を見るに、本当に思いついただけの質問なのだろう。

「妹が好きだった奴、兼同じ道場の弟子だ」

なので、店主も適当に缶コーヒーを啜りながら答える。要するに、幼馴染と表現して問題のない、ありきたりな関係である。

「ってか、店長って妹いたんだ」

が、店主のありきたりは、小野のありきたりではなかったようで、漫画を閉じると瞳を輝かせてくれたびれたパイプ椅子に座りなおした。

「道場って何の道場？ っていうか、友達じゃん多鞘さんと。なんでちょっと仲悪い感じだったの？ こないだ」

水を得た魚のように、カウンターに身を乗り出す小野。

「なんだよ、お前。さつきとノリが違うぞ」

「だって、店長って自分の話滅多にしないじゃん。だから無視されると思ってたんだもん」

「ああ？ 別に俺は過去を隠す系の暗いキャラじゃあねーぞ」

飲みきった缶コーヒーを足元に置いて、店主は酷く面倒そうに言った。

「俺の実家は、なんか長ったらしい名前の古武術みたいなのやってたんだよ」

「ああ、だから細マッチョなんだ」

「小っちゃい頃から無茶苦茶に鍛えられたからな。実家離れてもトレーニングだけは止められないんだよな」

少しだけ忌々しそうに、それと同じくらい楽しそうに、店主は自分の右腕は撫でる。

もう、家を出て七年だ。すべてを投げ出して七年だ。それまでの人生と同等なくらいに濃かったあの七年前が過去であることが唯一の救いであった。

あの嵐に出会ったのが、すべての始まりとも運の尽きとも言える。

「店長？」

と、七年前の懐古に入り始めた店主を、小さな声が引き止める。

「いや。何から話そうか迷ってな」

かぶりを振って、カウンターの秒針が五回時を刻むのを眺めた後、店主はおどけた調子で話を始めた。

「関守は、俺より二つ年下だな。どうにも言うことを聞かない悪戯鬼だったから、その性根を叩きなおすために、家の道場に来たんだ。たしか五つになるかならないか、その辺りだったな」

高々五歳で、道場に預けて根性を叩き直せと言われるなんて、一体どんな悪さをすればいいのか見当もつかないが、小野は黙って頷いた。

店主の表情は普段よりも少し楽しそうだったのと、店主の過去には非常に興味があったのだ。

「歳が近ければ友達になれるって、どこの親も妄信してるだろ？俺の親父もその例に漏れずに、俺と妹を呼びつけると『友達になつてあげなさい』ってだけ言ったんだよ」

歳が近いのは友情には全く関係ないし、そもそも友達とはわざわざ宣言したりするものだろうか？ 青臭い話だが、店主にしてみれば友達だと人間をカテゴライズすることじたいがナンセンスだと言わざるを得ない。

人間関係なんて自然と出来上がるものだろう。あの人と仲良くになりたいとか、あの子がきになるとか、そういう不自然に作り上げた関係が長く続くわけがない。

だから、店主は友達がすくなくないのかもしれない。

「ふーん。だから多鞘さんとも仲が悪くなったわけ？」

「まあまあ、それは物語のラストだよ。で、俺も子供の時は素直だったからな。『わかりました。じゃあ取りあえず君、三回廻って家に帰ってください』って断ったんだけど、そこから初めてのフアイト勃発だ」

「丁寧なの口調だけじゃん！一ミリも素直じゃないよ！」

「素直に、関守が気に入らなかつた」

どんな子供だ。と突っ込みたい所だが、店主の幼少期だ、今の店主をそのまま小さくしたくらいで釣りが来るくらいだろう。

そんな最悪な第一印象から、二人の生活は始まった。

「関守は自我の強い奴でな。五歳にして大人二人がかりじゃあないと抑えきれないくらい凶暴な奴だったんだ」

「孫悟空でも乗り移ってたの？」

店主も店主だが、関守も関守だ。なんだか世界観が違う。もっとも、狐憑きやら癩の虫持ちだとか、そう言った尋常でない子供の話は世界各地で有名だ。

だからと言って、珍しくないわけではないのだが。

「まあでも、大人が子供を抑えるって言うのは案外難しいんだよ。小さいってだけで、手加減せざるを得ない。その癖餓鬼っていうのは手加減もペース配分も知らない。おまけに、サイズが小さい分、攻撃が当てづらいだろ？ 全力で後先を考えない奴を、相手のサイズとか世間に対する見栄を考えないといけない大人が相手するには分が悪い」

なんだかわかるような、わからないような説明に、小野は眉の間に皺を寄せる。

「その点、俺はサイズも近い上に、ある程度技術があったからな。大人よりも楽に関守を止めることが出来たってわけだ」

比喩的な表現でなく、鎖で縛ってないと暴れるような関守は、最初の一年は兎に角気の向くままに泣き叫び、有象無象の区別もなく周囲を傷つける暴風のような存在であった。

そんな関守を抑えるために、店主は毎日のように関森と戦わされた。

勝率こそは百戦百勝の店主だったが、その戦いは本人が今語るほど余裕のあるものではなかった。

「ふーん。店長って強いんだ。なんか以外」

「おいおいおい。よしてくれ。そりゃあ、お前には勝てるが、お前の友達の世界とか出てきたら絶対負けるぜ？ あくまで、餓鬼の頃の話だ」

勘弁してくれと、店主は首をぶんぶん横に振る。いくら身体を鍛えているからと言って、昔強かったからって、今でも戦えると思われたら堪ったものではない。

「何で？ 小さい時から強かったんでしょ？ 格闘技の天才だなんてかっこいいのに」

「別に、小さい時から出来れば天才ってわけでもないだろ」

まるでその事実が人生の汚点だと言わんばかりの言い方に、小野は首を傾げる。

小さな時からその分野で活躍できる人間が天才で、練習量が他と比べて少なくとも出来てしまう人間が天才だと思っていた小野は、店主の言葉に意外そうな顔をして首を捻る。

「小さい強いつて言っても、産まれる前からそうなるように造られていたようなもんさ。あの家を継ぐために調整された機械みたいなもん。大抵の天才って呼ばれた子供たちは、そうなるように育てられているだけの話だろ？ 意識して、もしくは無意識してそうなるように我が子を自分の思うように育てているんだ」

「なるなる。確かに言われてみれば、『天才児』って親の教育が熱

心だつたり、そう言う家系だつたりするもんね」

両親が有名なプレイヤー。一族代々有名な音楽家。子供の教育に惜しみなく金を注ぎ込む親。言われてみれば、テレビに出てくるような天才少年とはそんな親を持った子供ばかりの気がする。もしくは、よくよく考えてみればそれほど凄くもない、一発芸のような才能だつたりするようなイメージがあつた。

「んで、数年後大人になつたその子が活躍する話もあんまり聞かないし」

「そうそう。俺もそういう人間の一人」

「何で天才じゃあなくなつたの？」

日本語として正しいか疑わしいことを訊ねる小野に、店主は苦情せざるを得ない。

「俺はお前のそういう遠慮のない所が好きだぜ？ 簡単さ、何で人間が地上を我が物顔で歩いているか考えてみれば答えはわかるさ」

「へ？ ちよ、うえ？」

店主の発言の一言だけが妙に頭に残つてしまい、小野は顔を真っ赤にして席から立ち上がる。立ち上がって、何をしたいのかが思い出せずすぐに席についた。

「何やってんだ？」

当然、店主は突然の奇行に目を丸くすることしかできない。

「な、何でもない」

「それで何でもないんなら、もうお前に助かる見込みはねーよ」

小野の奇行はもう助かる見込みがないと判断し、話を進める店主。

「人間のもっと凄い能力って言うのは、単純明快に適応力だ。その場に適応できるって言う能力ほど、万能なものはない。その証拠に、人間は酸素さえ満足にあれば何処にでもいる。寒くても暑くても、平和でも戦時でも、過去にも未来にも、地獄にも天国にも、人間はどこにでもいやがる」

まだ顔の赤い小野は適当に頷きながら、頬の熱を掌で確かめる。

「要するに、環境が変わったら、その変化について行ける人間こそが、真に才能のある天才なんだと俺は思うね。何処に行っても生きていける、自分を曲げながら貫き通す奴こそ、本当の意味での才覚ある人間さ」

そう言った意味では、店主にはからつきし才能がなかった。この店が全然流行っていないことがその証明になるだろうか？

「その点で、関守は天才だった。周りの人間……一番小さい俺でさえ、全く勝てないんだ。一か月もすると、あいつは妙に大人しくなつて、真面目に稽古するようになったよ」

「な、何で？」

「負け続けるって言うのは、屈辱なんだよ。負けるって言うのは、忘れがちだが、恥でしかない。最悪死に至る病だ」

捕食者に敗れてはらわたを齧られる野生動物を想像して、小野は静かに頷く。

「だから、これ以上負けない為に、関守は素早く順応したわけだ。

虎視眈々と闘争心を隠して、自分を曲げてあいつはクソ真面目に稽古を始めたんだよ」

「店長は真面目に修行してたの？」

「修行つてお前……でも、確かにあれは修行だったな」

言われてみれば、あれは稽古と言うよりは、仙人になるための修行と表現した方が正しかったかもしれない。走ったり筋トレしたりもあったが、裏庭の真つ暗な洞窟に閉じ込められたり、揺れる炎を眺め続けたり、気絶するまで断食させられたりと、真つ当なスポーツの練習では決してやらないような訓練が大半を占めていた。

「卒業試験の練習と表して、トラと同じ檻に入れられた時は、死ぬかと思つたな」

本番では何と戦つたのか非常に気になったが、怖いので聞けない。

「それは置いといて、俺も真面目にやっていたぜ。その環境に置いては、俺は適応できていたさ。そうなるように、造られて育てられたんだからな」

「店長つて実家嫌い？」

頑なに『育てられた』と言わないことを不思議に思い無遠慮に訊ねてみたが、店主は首を縦に振つただけでそれ以上は何も言わなかった。

「で、七年前。関守が二十歳になって暫くたつたくらいの時には、もう完全に俺じゃあ歯が立たないくらい、あいつは強くなって、俺の代わりに道場を継ぐ話まで出てきてた」

環境に適応し続けた結果、関守は誰よりも秀でた優秀な戦士にな

つっていた。道場内での評判も当然よかった。心技体を鍛えることによつて、幼少の頃の爆発するような感情もなくなっていたのでそれも当然だろう。

関守は誰よりも、道場の教えに適応し、その技を自分のモノにしていたのだ。

「ふーん。じゃあさ、店長が多鞘さん嫌いなのは、自分よりも強いから？」

「馬鹿言え、そんな怨恨で俺は人間を嫌いにならねーよ。それに、ルール無用なら今でも俺はアイツに勝てる位の自信はあるぜ？」

先ほどの話とは矛盾したことを言いながら、店主は話を進める。

「俺があいつのことが嫌いなのは、天才だからさ」

「なにそれ？」

「これは全く別の話になつちまうんだが、俺に妹がいるってのは言つただろ？」

「今日ね。ってか何々？ 妹さんのことも教えてくれるの？」

話の頭と同じように、小野は妹の話題に喰いつく。もしかしたら、紹介してほしいのだろうか。

もつとも、紹介することは不可能なのだが。

「俺が関守を嫌いな理由を話すには、不可欠だしな。それに、才能なんてつまらないものだって話の落ちにはぴつたりだ」

「それでそれで？」

「最初に言つたように、妹は関守が好きだった。関守も妹が好きだった。俺も親父もそれには不満がなかったし、どちらもその技量で言えば俺を越えていた。だからすべてが上手く行く筈だったんだが、七年前にちょっとした事件が起きてな」

それは、有り触れた人生の不文律。

詳細は長くなるので離さないと断った上で、店主はなんてことなさそうに、極々当たり前に今日の天気を言うように、はつきりと小野に結果だけを伝えた。

「妹はあっさりと死んじまった」

「へ？」

言葉の意味が捉えきれずに、小野は阿呆みたいに口を開ける。その顔を見て店主は口元だけ微笑むと、小野ではなく天井に視線を移動した。

「俺と関守の前で、死んじまったんだよ。細い声で、関守の名前を呼んで、『私以外の人と幸せになって』って言った後にな」

「……………」

「人間が死ぬって言うのは、一体何が悲しいんだろうな？ 身体はそこにあるし、精神はきつと不滅だろうに、人格なんて所詮主観混じりのご都合主義だろうに、俺は後にも先にもあれ程『悲しい』って言葉の意味を痛感できないだろうな」

深い息をついて、店主は視線を戻す。妹とは似ても似つかない、小野の顔は、困惑の色が濃かった。ひよつとしたら、話を聞いているのか不安になるくらいであった。

「それから、俺は実家飛び出して、なんとなくこの辺が気に入ったから、前の店主の爺さんからこの店を二束三文で買ったわけだ」

「……………」

「そつなんだ……………って多鞘さんの話に繋がってないよ！」

暫く空いてしまった間を何とか吹き飛ばそうと、小野は大袈裟にノリツッコミを試みた。成否は言わずもがななので、触れずに置いておこう。

店主もそのつもりらしく、再び天井に視線をやってから口を開いた。

「関守はそのあとすぐ、別の女を見つけて幸せになったんだよ」

それは関守なりの誠意だったのだろう。店主の妹が死んでから半年もしない内に、少し年下の美しい女の子を、妹の墓に連れて行って紹介した。笑って、一度も笑顔を曇らせずに、ただただ笑って墓石に話しかけていた。

その光景を、おそらく店主は一生忘れないだろう。

もし死人が笑うのなら、きっと妹は笑っていたはずだ。

それでも、許せなかった。

「妹がいなくて言う環境に、あいつはさっさと適応しちゃったんだよ」

いくら妹の最後のお願いだからと言って、そんな簡単に死んだことを納得できちゃう関守を、店主は赦すことが出来なかった。

「だから、俺はあいつが嫌いなんだよ」

「そっか」

珍しくひっそりとした声を漏らした後、小野は壊れかけたパイプ椅子から立ち上がる。

そのまま無言で椅子を折りたたむと、それを持ち上げてカウンターの向こう、店主の隣まで歩いて運ぶ。

不思議そうにその様子を眺める店主に、小野は笑顔を見せる。

「今日はち、隣でもいい?」
?

(後書き)

テーマリクエスト募集中です。

気が向いたら是非、感想に書いてみてください。

人生不敗もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6963n/>

適者生存 = 弱肉強食 = 盛者必衰

2010年10月10日15時05分発行